

創作民話 南沢のぺんちゃこい地蔵さま

一、南沢地蔵さまの誕生

西山（にっしやま）の旧米沢街道さある『逆さケヤキ』を少し下った杉林の山道で、地蔵さまは目を覚ました。と。

その日はまだ梅雨も明けねで、どんよりとした空もようの日だった。

目を覚ましてたまげだのは、ものずき顔をした七、八人の男達に囲まれていだごどだ。その中で一番に品のいいお顔立ちをした中目の威徳寺の和尚さんが目覚めさせて下さって、名前も『南沢地蔵』とつけてくれました。

男達のかだっている話から、地蔵さまは、どうやってござさ来たががわがった。男達の内のお母さまが真つ赤な頭巾と涎掛けをこしゃって（作って）くれて、大事に抱いだり、おぶったりし

てござさちえで（連れて）来てくれだんだ。ありがでげど、思ひ出すどつとばり（すこし）おしよすい（恥ずかしい）ごどだ。

男達は、地蔵さまは酒など飲まねの知ってるくせに、でっけい瓶の酒を供えるふりして皆んなでわいわい、さわぎながら飲んで酔っぱらって帰って行った。男達がいだごぎは、やがますます早く退ければいいなど、地蔵さまは思っていたが、いざ居ねぐなつと、とぜえんで（寂しくて）とぜえんで泣きだくなつた。

この峠は昔、けものばがりでねぐ、多ぐの里人や旅人が通つた道だげど、今では小原新道が出来だし、西山じゅうさ杉を植林したから雑木林が無くなり木の実もなんねぐなつて、けものも来ねし、山菜もほぎねがら里人も来ねぐなつた。

んだがらどいつて昼間ながら、地蔵さまは遊び歩くわけにもいがねがら、いつつも晩げになんのをじーと待った。

雨つぷりの日は、やばついし、足跡ものごつから、天気の良い晩げだけ出はるごどにした。

「いっつも行くどごはたいいてい『梨の木平』が多いど。そつがらの眺めはまた格別で、太平洋の漁り火だの、近ぐや遠ぐの町の灯がいつ見えで、地蔵さまは生まれ故郷を思い出して目さ一杯涙をためていづまでもいづまでも眺めでいだど。」

それがら、も一つ、昼間なが出歩がね理由は、この頃、『逆さケヤキ』がなんでだが有名になつて、若げ人達や、年寄連中がとんでもねえどぎ南沢を登つてくるがら、ゆだんなんねがらだど。この前なんど、あんまり退屈だがらちよつこら遊びに出はろどしでだら、里の小学校の子ども達がごやごや登つてきて、みんなすてそつちだのこつちだのなでるがら、くつつぐつたくて、くつつぐつたくて、あぶねぐ逃げ出すとこだつたど。んでも、ぐつと我慢すてこらえでだら、子供達は「なんだがこの、おじぞうさんの顔、笑つてるみで！」というんだ。あぶぐもねえのに、なずぎ（額）さ汗かいたな。」

二、逆さケヤキさ行く

地蔵さまもだんだんと西山さなれできて、出歩ぐごとも多くなつたど。

嘉右衛門ケヤキの会のものずき連中は

「後がらきだ新米地蔵さまは、前がら居だ山の神や、馬頭観音さま、権現さまなどど、うまぐいぐがや。」

と心配していだがら、まずは一番近いどこの神さまがら挨拶さゆぐごどにしたど。

逆さケヤキの根元さある、狼を祀った神さまは、地蔵さまが来たんで喜んでしまひ

「いどごさ来てくれだな、ほろぎ（おとし）ものがあるんで一緒に探すて助ろ。」

「ほろつたものつて、何んですか？」
て聞いたら、狼の神さまは

「飛脚の嘉右衛門が、うんとつてめんこがつてだ狼の牙だ」と。

今までそつこつたねだがいまんどころ未だめつけらんねでいるんだと。また、同じ根元の狼の神さまの隣に居られるもう一人の神さまは誰かが供えだ酒を戴いで、良い気分でお休みしてだが、狼の神さまの元気で、でがい声に目醒まして、もつくら起きでしまつたど。そして赤げ顔して、白髪になつた長いまづげの目をぱちくりぱちくりさせていだど。

地蔵さまは

「折角気持ちよくお休みしていだどころ、起ごしてしまつて申訳ありません。今度この下さ参りました、南沢地蔵と申します。ここさ来ることになつた理由は、『嘉右衛門ケヤキの会』という、ものずき連中に連れて来られました。若造ですが今後ともよろしくお願いします。」

と謝りながら自己紹介をしたら、赤げ顔の神さまの顔がしわくちやになり「おお、そうが、そうが、おめさまも、わしど同じだな。わしはな、でいぶ前になるが中目部落の若げい連中にやっぱりここさ連れでこれれで祀られたのだ。」と言うので

「だいぶ前つて、いつごろ連れでこられたのですか。」

と、地蔵さまは嬉しくなつて尋ねたら赤げ顔の神さまは

「そうさなあ、わしもそろそろ二百五十歳になるがらなあ。ほだ、ほだ、丁度そのころアメリカつていう国が、イギリスつていう国からやつと独立して一人前になつた、(安永四年【1774年】)そのころだな。」と言つて目を細め、昔を思い出しながら、かだつたど。

地蔵さまは、アメリカという国は意外と若い国なんだなと思つたど。

逆さケヤキの下の二人の神さまに、

「近いのでまたちよくちよく来ますので、お話の続きはまたあとで、たつぷり聞かせて下さい。」

と言つて、おいどましたど。

次いでだから、逆さケヤキの上のほさある唐(闘)犬石さも行つてみだが、たまげだな。地蔵さまの頭がペロツと入るような大つきな犬の足あどが付いだ石なんだな。こんなでつけ犬さ、その辺でいき逢つたら、なじよすべな一ど、地蔵さまは思つたど。

そして、その石さ足跡あしあとを付けだ八幡太郎やちまんたろうの飼かい犬いぬに追おっかけられだ狼おおかみは、嘉右衛門山の頂ちようじよう上うへ近くで、あんまりおつかなくこわ怖おそくして、とうとう石さ固かたまつてしまい、狼おおかみ石いし』さなつてしまった石があるんだと。うんと急きゆうで、もたらだらけの坂を苦勞くろうして登りその狼石おおかみいしも行って見だが、今のどごろ未まだ、おつかね思おもいが解とげねでいつがら、「しばらくは狼おおかみさ戻もどらねようだな。」ど、地蔵さまは思おもつたど。

三、テングさまに会いに行く

別な日に、地蔵さまはささでいら（笹平）のテングさまあいさつも挨拶あいさつをせねばと思おもい、いつつもテングさまが行いつてゐるらしい神樂岩かぐらいわさ行いつたど。途中『ヘッピリ坂』と言いうどごを登のぼつたがとつてもひどい坂で年とし寄よりりはもちろん若い嫁よめごでも、この坂を焚たき木かや茅かやなどいつぺ背負よつて登のぼつたら「人が出でつぺな。」ど、地蔵さまは思おもつたど。

神樂岩でなんぼ待まつてもテングさまは来きねので、貞治山ていじの神の前まへを通とつて帰かへろうと思おもつたら、山の神さまが声こゑかげでくれだど。「最近さいきん、テングさまはさっぱりごの道みち通とりませんよ。別な道を歩あひいているようよ。今この辺はガス管かんの工こう事じで道みち路じほつぐり返かへしていつからね。」と優やさしく教おしえてくれだど、地蔵さまはやつぱり山の神さまは女おんなだなど思おもい、何なにだがうれしくなつたど。

そして、地蔵さまはよげなごだと思おもつたけど「何なにでこんなどごろさいらつしやるですか。」と尋たずねだら

「昔、小原村と中目村は仲なが悪わるくて境さかい争あらいが絶あえなかつたの。そこで私がここに立たつて争あらいが無なくなるようしたの。」と、きりりとしたお顔で答こえてくれたど。女おんなでも山の神は強つよくて偉えらいなあど、地蔵さまは思おもつたど。

地蔵さまはテングさまにはそのうち、朝間あさま、こつ早くツボツケ

の物見石さ行つて逢うことにしようと思つた。

今日、テングさまに逢えない分、思いきつて齋川の『権現堂』
さ祀られてる、権現さまさ逢いに行くことにした。

権現さまは丸こい背ながを、よげんと丸くして

「よぐ来た、よぐ来た。」

と土べださ、ぺたつと座つたまんま喜んでくれだ。

地蔵さまは自分の乗っている台座は立派すぎるので、せめてそ
れの半分ぐれでもいいがら、権現さまさも作つて上げだいなあど
思つた。

帰り道、通りすがりに『テングの相撲とり場』さ寄つたら、小

原や齋川や越河のテングさまだちが集まつて世間話をしていだ。

「ささでいらのテングさまはいらっしやいませんか。」

と尋ねたら

「今さつき帰つていつたばかりだな。」

別なテングさまは

「雨乞い石さ寄つていぐつて言つてだな。」

そしたら別なテングさまは

「あのおがだはしょうがねいなあ。ほでねぐとも今年は雨が多い
とゆうのに。」

「南沢の地蔵さま、ささでいらのテングさまさ、お逢いになつた
ら、なんぼ雨呼ばり唄が気に入ったがらつで、いづだりかつたり
雨乞い石で踊つたり唄つたりするの少し控えるように言つて下さ
らんか。」

「里の皆さんも今年の雨の多いのに、うんざりしているようです
よ。」

と、テングさま達が口々に言つた。

地蔵さまは、そういえば今年は雨の日がよぐ続き『かぐれつ畑』
の麦の刈り取りも遅れだなあと思つていだので、早くささでいら
のテングさまさ逢つてお話しなくては、ど思つた。

次の朝、地蔵さまは未だ暗いうち『ツボツケの物見石』さ行つ

て、ささでいらのテングさまを待つてたら、一枚歯の足駄あしだの朴齒ほおつばをカランコロンと響かせながら物見石さやつて来たど。

そして、地蔵さまの目の前で自分の背丈せたくの五倍ばいもある物見石のてつぺんさひよいと飛び上がり辺りをキョロキョロと見渡したど。

そして口の中でなにが呪文じゅもんのようなものを唱となえると突然とつぜん、鳥ども、けものどもつがね

「ぎゃあ。」

という大声をだしてから、初めで、地蔵さまを見つけだよようにして物見石の上から声をかけたど。

「おはよ。南沢の地蔵さま。別に隠かくれて居たわけではないが、少し気を揉もませようかなあと思つてな。」

と悪戯いたずらつぽく笑いながら挨拶してくれたど。地蔵さまは型かたどおりの挨拶を済すませてから昨日の話をするとテングさまは

「あいづら心配しんぱい性しょうだからなあ。わしだって加減かげんをわきまえてやつてるんだがら、おめさんまで心配すんな。それにしても、今年

少しやりすぎだがな。」

と少し神妙しんみょうな顔つきになつて、

「んでも、今年も豊作ほうさくじゃ、稲いねの穂ほも出始あまったぞ。後あと、心配なのは台風だけじゃが、この辺あたりは、ていした被害ひがいも毎年まいとし無なのはな、おれたちテングさま達が大きな柏かしわの葉はっぱのうちわで扇あおいで、台風ふうせば防ふせいでいっからだどお。」

と、太くて長げ鼻をもつと太く長ぐして自慢じまんしたど。

テングさまは、いっつも好き勝手かつかさま気儘きままに遊あそんでばかりいるどみんなは思おもっているようだが、たいした立派りっぱな仕事もちやんとするんだなあど、地蔵さまは感心かんしんしたど。

四、お姉さまさ会いに行く

嘉右衛門ケヤキの会の、ものずぎ男達は、この地蔵さまをたてる

五年も前めに、『三枚屏風岩びようぶ』の上さ、西山さ来る人たちの安全と、世の中の平和を願って、山の神を建てだんだど。その話を聞いた、地蔵さまは

「ほんだからその山の神さまは俺おれの姉あねさまになるだな。」
と思つたど。そしたら、地蔵さまは矢やも楯たてもたまらず、その日の晩げになんの待ちかねて地蔵さまは『牛うすつくびれ峠』を越えていそいそど出がげだど。

三枚屏風けしよふうに着くと山の神さまは、どっからが帰つてきたばりのように化粧けしよもおどさねで、きれいな服を着たまま眺ながめの良い高台にある家ほこら(祠)のテラスでワインなど召し上がって寛くろいでいだっけ。

「こんな山奥に一人で住まわせらつて、とぜんでねのがい？」
て尋ねたら山の神さまは

「なんの、なんの、私をここに祀つた、ものずき連中は年に二回のお祭りの日ぐらいきり来ないから、全くあてにしてないけど、

このごろ世の中物騒ぶつそうでしょ。隣の国など、何んか大きな物体ぶつたいをぶち揚げたり、恐ろしい爆弾ばくだんを作つたり。遠く西の方の国では、自分の信ずる神様が一番偉えいい、などと云つて多くの罪つみも無い人たちを殺したり。自分の国の領土りょうどの境さかいは、もっとそつちだ、とか。沢山あるのに石油をほかに分けてやらないとか、わめぎり(自分勝手)な人が多くて、争いが絶たえないじゃない。その争いの仲裁ちゆうさいに行つてるから、忙しくて忙しくて寂しいなんて思う暇ひまがないのよ。」
そして

「本当なら山の神はね、稲が田んぼにある間は田の神にならなくてはいけないの。でも、この山には沢山の山の神さまがいらつしやるから、そつちのほうは皆様みなさまにお願いしてるの。でもまあよく来たね、帰つててよかつた。」
と言いながら、ほのかな良い香かおりをさせて、細い指のきれいな手で地蔵さまの頭を何回も何回もなでてくれだど。

地蔵さまは何だが嬉しくなつてしまつて、また時々ここに来よ

うと思ひ、今度来るときは、この西山で一番きれいな花フシゲロ
センノウをお姉さまに持つてこようと思つたど。

そして僕も何か世の中に役だつこと、やんねばと考へたど。

そこで帰り道で考へだごどは、三枚屏風の山の神さまやテング
さまのようなでつけいごどは出来ねがら、まずは南沢を登つて、
『逆さケヤキ』さ来る人だちを守るごどが一番だと思つたど。

それがら、この前、からだ中くすぐつた、里の子どもだちがケ
ガや悪い病氣にかがんねように、宿題忘つせねように、悪いごど
する大人になんねいように見張つてやるごどにしたど。

五、お薬師さまさ会いに行く

風もねぐ静がな昼さがり、地蔵さまは背中の方の南沢の向い側
がら確かに話し声が聞こえだような気がしたど。目をこらしてよ
ぐ見ると、雑木林の間に薬師さまがお二人いらつしやるのが見え

だど。こんなに近ぐさ仏さまがと、地蔵さまはたまげだど。

さつそぐ挨拶に行かねばと思つて出かげだど、すぐ目の前さ見
えるどごだがら簡単に行げると思つたら、何んの、何んの、崖ま
だ崖で道路も無ぐ、すこたまうぎにはいで、やつとたどり着いだ
ど。そして、地蔵さまは息を弾ませながら

「何んでこんな谷間のおつぽろげるような道も無どごさ、ござん
のつしや。」

と、一気に尋ねたら、薬師さまは、たいそうのんびりと
「昔は、ちゃんとした道があつて、の、里の人が糠坂峠の方の山
仕事さ行くどぎは、『逆さケヤキ』を南沢の北の方さ見ながらこ
こを通つたもんだ。道が無ぐなつたのは、の、最近杉の植林をし
てがらだあ。ほんで、道があつた沢が崩落してしもうたのだよ。

そのうず我々も谷さ転げ落づつぺな。」
と笑いながら悲すい顔したど。

そして、も一人の薬師さまが

「我々がここさ居る理由は、の、昔、未だ道路がちゃんとしてい
だころ、里の多ぐの部落や町さ、外国から来たコレラ（注1）とい
う、うんとおつかね病がはやって、の、いつぺんに多ぐ人が亡く
なったんじゃ。そして、の、これ以上コレラが広がんねようにど、
里人がわしらを建てだんだ。おめさまも、沢向の近ぐさ居るんだ
がら、の、ちよくちよく遊びさこ。」
とかだつてくれたので、地蔵さまは今まで独りぽちで、とぜん
だ、とぜんだと思つていなのが嘘みでに消えて、何だが、ござら
の場所がだんだん好きになれそうだと思つたど。

六、地蔵さま里さ行く

地蔵さまは、昼ん間ながは、どごさも出がげらんねがら、独り
で考えだど。この峠道の上の方さは大分出がげだが、学校の生徒
や大勢の里の人たちが登つて来るこつから下の方はどだんなつて

んのがなど。もし神さまや仏さまがいたら、やつぱり挨拶さ行が
ねばねえなど思つたが、それは口実で、本当の理由は『梨の木平』
がら見だ、里の明るい灯をひと目、間近で見でみだがつたがらだ
ど。

意を決した地蔵さまは、おつ月さまがでつかぐなつて明るい晩
げに峠道を、誰さいぎ逢つても、わがんねようにど、ほつかぶり
して出がげだど。ところが歩きだすとすぐに一番に逢いだぐねえ
近ぐさ住む、年増の雌狐のオギンどばつたり逢つてしまつたど。
オギンは近頃はやりの先つぺをオシヤレに白く染めた太いしつぽ
をゆらゆらさせながら山中聞こえるような甲高い大声で

「あーら、お地蔵さまあ、今晚もお出がげですかあ。毎晩げ、よ
ぐ精がでますごだ。」

とぬがす（いった）もんだがら

「ええ、まあ。」

と、蚊の泣ぐような小さな声で言いながら、地蔵さまは、ほつか

ぶりをそつと取つてしまつたど。

少し下つて九十九折の曲がり角に馬頭観音さまが居られたが、初めてなので、何がら挨拶を切り出したらいいのが、地蔵さまは迷つたが、まず

「観音さまは何時がらここさいらつしやるですか。」
と尋ねたら観音さまは

「そうじゃのう、未だ村の衆が、ちよんまげを結つてだ時で、ちよどアメリカの黒くて、おつきな鉄の船が浦賀というどごさ来て、日本中が大騒ぎした、あのあたりだから百五十年ぐらい前になるかのう。」

と言いだし、ごごに立つてるわけも話すてようだったが、長くて悲しそつだつたので、(注2)地蔵さまは

「観音さまとは隣合わせだがら今度ゆつくりお話を伺に参りま

す。」
と言つて逃げるようにしてさらに下つたど。

雑木林が切れ、見晴が良く、月の光が下の部落の家々のいぐねや屋根を照らし、夜だのに田んぼの青い稲もきれいに見える峠道の中頃さ着いだど。そごさ、双子の山の神さまの家(祠)があつたど。

地蔵さまは挨拶をせねばど、明かりがついてる方の家に声をかけたら妹さまの方の家だつたど。

「今の時期、わだすども姉妹は田の神さなつで里のほさ行つてだが、ちよつこら着替を取つさ今戻つたどごだ。」
と三百歳とは思えね張のある声と、しゃんと背筋が伸びた姿で挨拶を下さつたど、そして

「そういえば、逆さケヤキの近ぐさ若い地蔵さまがめいらしたど聞いだが、おめさまだつたが、わざわざ、えいさつに來てくれで

のう、若いのに感心じゃ、姉さまもいだら喜こんだべに。」
昔はこの姉妹もさぞ美人だつたべなと思ひながら、地蔵さまはこの双子のばあさまに何かしてやらなくては、と急に思ひたつて

「何がこの私にできることがあつたら言い付けで下さい。」
と言つてしまつた。

「そうさのう、たいがいのごとは二人でできるがの、姉さまの家が傾き始めだで何とが秋の稲の刈り入れが済むごろまで直してくればありがたいのじゃ。」
と言われた。

地蔵さまはこれはしたり困つたことになつたぞ、と思つたぞ。
未だ修行が足りねので、まだそんな大仕事はできっこねいの分かつていだがら。そごで、だめもどで、『ケヤキの会』のものずぎ男達さ頼んでみつぺど思つたぞ。

それがら、地蔵さまは急な下り坂を下つて行くぞ『とうせんぼ石』だの、『千年ふじ』だの、『合体杉』だのという変な名前のついでどごろを通つたぞ。この名前をつげだ人も変な人なんだべなぞ、地蔵さまは思つたぞ。
もう少し下つて『熊の爪跡』に来たどぎ、地蔵さまは

「ははあーん、こいずがあ。」
ど、独り言をかだつて、そして思い出したぞ。

それは、ある晩げ、地蔵さまが出がげようとしてるどこさ、南沢さある幻の滝の滝壺さ家がある熊五郎と言う独身の熊が訪ねて来て

「ちよつこら、こご通つたもんで、新すぐ参りすた。地蔵さまさ挨拶すつぺど思つて寄せでもれいましただ。それにすても、たいしたぺんちゃこい(小さい)地蔵さまだぞだ。」

と挨拶とも独り言ともつかないことをかだり、続けて

「何だがこのごろこの米沢街道さ、いろんな人がいつ来で騒がしぐなつたぞ思ひんすか?、俺なんが家で昼寝をしてるど、しよつちゆう覗がれるがら睡眠不足になつてしまつてるんだ。んだがら、みんなおっかながつて(こ)わがつて)来ねようにど、うぎにはいで(くろうして)石さ俺の爪跡を彫つて置いだが効き目はさつぱり無えようだな。」

と、言っていたいだっけ、地藏さまも里の小学生と同じように「これではなあ。」
と思つたど。

南沢を最後に渡る『ものずき橋』の手前にある馬頭観音さまをお参りして、話をきこうとしたが、観音さまはあんまり話したくない様子で

「西山の猿さかまうなよ。」(注3)

とだけしゃべつたど。今度ゆつくり、詳しい話を聞きさ来ようと、地藏さまは思つておいどましたど。

毘沙門堂まで行つて毘沙門さまと挨拶しようと思つた地蔵さまは、人家の前を通つたら電気という灯りを目にしたど。

そのまぶすいごだ、まぶすいごだ、目が潰れつかど思つたど。それがらも一つ、どでんしたことがあつたな、それは四角い箱の中で唄つたり踊つたりして賑やかにお祭りみでなのしてたの、ちらつと見たごどたな。なんで、あんなせまつこい箱の中ではない

るのがな、もつとひろーい外に出でのびのびとやつたらいいのになあど、思つたど。

大きな鳥居をくぐると、お堂の一番奥に目玉をギョロツとさせて、幅が広くて長い刀(矛)を持ち怖い顔した、毘沙門さまが居られだっけ。

地蔵さまは恐る恐る挨拶をしたら毘沙門さまは

「今日ここにお地藏さまがいらつしやるのは分かつていだもんだがら、ここに出でお待ちして申して居りました。でも本当は十二年に一度、寅歳の初寅の日にきり、私は表さ出ねごとになつて居らでございます。でもよぐ来られましたな。山の上の方さ独りで居られでお寂しぐございせんが。」

と顔に似合わず優しい言葉をかけてくれたので、地蔵さまは緊張が一ぺんにとげだど。

帰り際に、毘沙門さまは

「もす、お地藏さまをあそごさ祀つた連中がさつぱり面倒を見ね

ようでしたら、このわしが代わりに罰ばつを当てますのでご心配なされませんように。それにすても、夜遊びさ出はるのはほどほどになさいませんと。里では大分噂うわさになってつおりますからね、ほんなわけで、本気になって夜中に提灯ちようちんつけて、お地藏さまを確たしかめさ来るばがなものすぎ連中れんが居りますからお氣付けて下さいませ。」

と、笑いながらかだつてくれだど。

チャンチャン オツスマイ

注1. 明治十五年頃閑上港に上陸したコレラは仙台を始めこの白石近郷にも猛威をふるい多くの死者を出した記録がある。

注2. この場所で仕事ケガをして死んでしまった馬のための供養塔

注3. 西山の猿達が造った猿酒を飲んでしまった男の馬が猿に殺され、その馬の供養塔

嘉右衛門ケヤキの会
会員 八 島 忠 賢 作